

(令和4年1月25日・火曜日／文学館で収録)

前置き

前回の「よみがえれ！とこしえの加清純子展」は2019年に行われたが、予想以上の関心を集め、私も加清さんの思い出について複数回、話した。

で、今回、「再び展」が開催されることになり、さて何を話そうかと迷ったが、加清さんが生きた戦後という時代と加清さん自身の生き方の関係を、**ジェンダー**という切り口でお話ししようと思う。

A ジェンダーについて

皆さん、**ジェンダー**という言葉をご存知でしょうか。

すでに**フェミニズム**という言葉はご存じだと思います。

これは女性解放思想という意味ですが、男女同権・男女平等という言葉のあと、**ウーマンリブ**という言葉につづいて使われるようになった。

○**ウーマンリブ**（和製英語） women's lib（ウーマンズ・リブが正しい／libは liberation で解放）

1960～70年代、ヨーロッパ、アメリカ、日本でおこった女性解放運動。1970年11月14日渋谷で開かれた第1回ウーマンリブ大会が、男女雇用機会均等法の制定に大きな役割を果たす。

○**フェミニズム**（feminism）女性解放思想およびこれに基づく社会運動の総称。性差別に影響されず、万人が平等な権利を行使できる社会を目指す。

○**ジェンダー**（gender）性差と訳す。生まれつきの種類。遺伝子のゲノムやジャンルと同じ語源だそうです。参考文献：小谷真理著『性差事変』（青土社）○書影あり
ジェンダーは、日本では1990年代から使われるようになった。「生物的性差に付加された社会的・文化的性差」という意味で使われる。

sex difference（生物学的性差） gender difference（社会・文化的に構成された性差を指す）

●具体例：男は狩に出かけ、女は家で炊事をし、貝や海草を拾い、畑仕事をする。

しかし、最近の研究では、原始社会にも体の大きな女性がいて、彼女らも狩に加わっていた。

前段が長くなったが、今回の加清純子論は、この**ジェンダー**という言葉キーワードとして話を進めていくが、その前提として彼女が生きた戦前と戦後という時代がどんな時代であったかを、さっと、おさらいする必要がある。

なぜなら、この時代は戦後まもない時期で、女性開放の考えが、戦前世代と共学世代では決定的隔たりがあり、この社会的矛盾が加清さんの行動を解く鍵になるかもしれないから。

B 札幌を発ち、阿寒で発見されるまで

今年2022年の70年前、昭和27年（1952年1月16日）に加清さんは札幌を発ち、釧路へ向かった。目的は釧路刑務所にいる岡村昭彦氏に会うため、同行したのは弟の春

彦氏（南高定時制＋青銅文学同人）であつたらしい。参照：暮尾淳さんの講演録「姉・純子の思い出」抄／（前回の加清展）

釧路で昭彦氏と面会し（ウィキペディア：17日・19日・21日の3回）、3回目の面会のとき、保釈金5000円の金策を頼まれる。

○参考：昭和27年の大卒の公務員初任給6500円、高卒なら4600円。ラーメン25円 喫茶店のコーヒー30円 新聞購読料280円。

ともあれ、加清さんは絵を描き、それを売って工面できると考えたのであろうか、阿寒へ向かい、宿を出たあと行方不明となった。（推定日1月23日）

遺骸は4月14日、（渡辺淳一・著『阿寒に果つ』中公文庫では13日）釧路北峠の一角で釧路営林署の職員によって発見された。阿寒湖湖畔から6キロの地点。○書影あり

当時、1月21日夜7時40分頃、南6西16で起きた白鳥警部射殺事件との関連も一部では疑われたらしい。

理由は、釧路刑務所に収容されていた岡村昭彦氏は、山村工作隊の一員として医師免許がないのに、医療行為をしたという罪に問われていた。

C 当時の政情

日本は1941年（昭和16）12月8日に大東亜戦争を始めた。劈頭の勝利（ハワイ真珠湾攻撃）。香港やシンガポール攻略、英戦艦プリンス・オブ・ウェルズとレパルス撃沈など南方作戦の勝利で大いに浮かれていたが、昭和19年ごろから敗勢に転じ、島々での玉砕が相次ぎ、ついには沖縄が陥落、本土空襲、広島・長崎への原爆投下を経て、昭和20年8月15日無条件降伏。

戦後が始まり、それから食糧難、物資欠乏の困窮に陥った。

占領軍の進駐は20年の秋、ジープに乗って山鼻電車線を真駒内方面へ向かう隊列を私も見た。

占領軍の犯罪も多発したが、GHQの情報統制があり報道できなかった。豊平川堤防での婦女子暴行事件、13文の靴跡としか。

当時、労働争議が頻発、武力闘争などもあり社会情勢は不安定だった。国鉄総裁下山事件、三鷹事件、桜木町事件が連続し、こうした政情下、札幌でも白鳥事件が起きた。

実は、山村工作隊運動もこうした政治活動の一環で、おそらく中国共産党の農村工作隊に倣ったものだったと思う。

小松左京さんも関係していたこともあったが、当時のことは『小松左京自伝』（日本経済新聞社出版局）に書いてある。中国とちがって、ラジオや新聞が全国辻浦々まで普及している国では通用しなかったと語っている。○書影あり

D 男女平等と男女共学

新憲法施行1947年（昭和22年／加清さん中学2年）5月3日

憲法24条 「両性の平等」条項を起草したのは女性 ペアテ・シロタ・ゴードン

第24条

婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。

②配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその

他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない。

当時の記憶にあるが、男女平等に並んで、男尊女卑の反対語、レディー・ファーストという新しい言葉が現れた。

このように時代の基本的価値観が変わったのが、戦後。歴史というものは、ちょうど竹の節目のように価値観が転換する。

参考文献：ミシュル・フーコーの代表作『言葉と物』○書影あり

〈エピステーメー〉→ギリシア語の「知識」。哲学用語では「時代ごとの知の枠組み」を言う。16～17世紀のエピステーメーは〈類似／胡桃が脳に似ているから薬になる〉。次のルネッサンス期では〈秩序〉。中世的秩序が崩壊し、臆気ながら人間が意識され、19世紀になると確固たる〈人間という概念〉が確立する。

しかし、近代国家としては後進国であった日本人の意識レベルは遅れていた。

明治憲法を一例に挙げれば、結婚には家長の許可が必要だった。（お偉方がゴードン案に強く反対した）

旧民法 750 条

家族が婚姻又は養子縁組を為すには戸主の同意を得ることを要す

戦前は〈家〉単位→戦後は〈個人〉単位へ

例：なぜ国家と言うか。国に家をつけた国は、日本だけではないだろうか。

加清純子の父／教育者・家父長的

参考文献：ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』○書影あり

①原始社会：生産は土地に依存。成員（人手）の再生産を行う必要性から、各氏族が縁組みを行う。成員を増やすため、積極的に他氏族と女性を交換し、近親相姦を避けるルールができる。

②専制社会：専制国家では始祖の時代、神話の時代まで遡って、国民みな兄弟という超コードを作り一体化して国家をまとめ、運営する。明治以降大東亜戦争までの日本の体制。家族主義的全体国家。（敗戦でこれが瓦解し、〈エピステーメー〉が代わった）

③資本主義社会：貨幣が中心であるので、女性にとっての結婚は完全に自由になる。（これが敗戦の意味）同時に、労働すらも記号化され、賃金という貨幣価値に変換され、資本主義（機械／体制）へ組み込まれる。（チャップリンの映画／テラー・システム）

E 引き裂かれた行動原理

① 軍国少女だった彼女（暮尾淳さん／「姉・純子の思い出」抄）アツツ島玉砕慰霊文に選ばれる。／一方、世間では、戦争反対・平和思想／価値観の180度転換を強いられた世代が男女共学世代。

② 戦前（戦争）は悪、戦後（平和）は善＝当時の社会主義運動

③ 共学時代の〈女性解放〉対〈戦前派の反感〉／矛盾。

彼女の善と悪との規準は、引きさかれていたと思う。（敗戦と占領、新たな支配者GHQによる戦後教育など、行動の基本原則、善と悪の180度転換は、我々日本人の精神に深刻な混乱をもたらしたはずだ）

敗戦によって生じたこうした価値観の転換期に遭遇した（ラカン：エピステーメー）、

彼女の心は、激しく揺れていたのではないだろうか。（私自身も社会主義・実存主義→構造主義・ポストモダン→ドゥルーズ&ガタリへ）

○ある研究（戦後日本における男女共学とジェンダー平等に関する一考察）

同世代の男女は、男女平等という新しい思想を抵抗なく受け入れたが、上の世代はちがっていたようである。

F 今回、公開された「偽りの作」（清瀬舜子・名義）コード分析

参考文献：『文学テキスト入門』（前田愛・著／ちくまライブラリー）○書影あり

○「偽りの作」は、400字詰で7～8枚の掌編だが、無駄なく構成された密度のある好編である。○雪像制作中の写真を2枚入れる。

① 題名：「偽りの作」という題名の真意が、結末部にある。

結果などどうでもいいと思う反面、一等になったが、賞金はキャラメル1箱を皆に分け、1粒を食べる。

もしかすると、加清さん自身が、自分自身を「偽りの人生」と、感じていたのかもしれない。

また、チャーホフの『桜の園』は、この劇の最後で桜の木が切られる音で、華やかな貴族社会の崩壊を暗示したとも考えれる。

実作者の経験としては、題名によって著作の売れゆきが決まるので苦労するものだ。

② 作者名：清瀬舜子 キョセ シュンコ→加清純子カセ ジュンコ

級友批判の作なので、しかもクラス誌なので、匿名にして、現実ではないという伏線を張ったのかもしれないが、作者名は作品解釈に一定の手がかりを与える。

たとえば、三島由紀夫や芥川龍之介は自殺。樋口一葉なら夭折。

③ 書き出し：出来事の最後から書き出すうまさ。書き出しと結末が繋がる。文字の連なり（線形）である物語は円環を構成する。プロ並の技）

同時に、身体と心の疲労感を融けた雪像で比喩的に表し、共鳴させている。もし、雪像が融けていなかったら、あるいは壊されていたとしたなら、物語は別の展開になる。さらに、級友らの非難、皮肉、嫌みがつづき、主人公の心を傷つけると同時に、心理までも、説明ではなく描写している。

④ 主人公：ヒーローとも言うが、作者の分身であると同時に、読者が物語の主人公に心を同化させる。（ギュスターヴ・フローベル（1821～1880 写実主義を確立）「ボヴァリー夫人は私だ」）

同時にこの物語の視点は一つで、舜子。彼女の目を通して、級友たち（バイ・プレイヤー）の行動や発言が語られる。

なお、それぞれの役割は、善（舜子）／悪（級友たち）／中立（少数の級友）

⑤ コンテキスト（社会的背景）：伝統ある雪戦会に代わる平和憲法下の雪像コンテスト。

インターテキストュアリティ：実際に行われた、クラス対抗の雪像コンテスト

（フランスの記号学／ジュリア・クリスティヴァ／全てのテキストは先行するテキスト／プレテキスト）からの引用であり、その引用されたもののモザイクあるいはデフォルメである。

先行テキストは絵画（拙作『柔らかい時計』）であったり、音楽（村上春樹『ノルウェ

イの森』はビートルズの曲（正しくは WOOD と単数なので、「ノルウェー材の部屋」らしい）だったり、都市の場合もある（スチーブンスンの『ジキルとハイド』ではエンジンバラの旧市街と新市街がそれである）。

⑥**結末**：不完全な作であったが、1等になり、賞品のキャラメルをクラスの皆で1粒ずつ分け合い、「これでいいのさ」とつぶやく。

註：賞がキャラメル1箱はこの時代の物資不足を示すコードである。

主人公の意図と矛盾：雪像造りによってクラスを一致団結させようとした舜子の意図は稔らなかった。しかし、雪像は1等になった。

だが、彼女は、制作の途中で、芸術は個人の営為であって、全体の作業とは矛盾することに気づく。この、アンビバレンス（相反する感情が同時に存在する／愛憎の同居）な状態に陥る。見事な**心理小説**と言えるのではないか。

G 余談／カフカ＝加清純子の意外な共通点

フランツ・カフカと加清純子は、共に7月3日生まれ。ヘルマン・ヘッセは7月2日で近い。実は、カフカもヘッセも私の大好きな作家であるが、共に蟹座。加清さんが気になるのは、同じ理由かもしれない。因みに私は4月の牡羊座で、直角の関係である。

誕生日がその人物の基本的性格を決めるという説を信じるか、信じないかは、各自の考え次第であるが、7月3日生まれの性格が「偽りの作」とシンクロしているように、私には思われるのだ。

ネットで調べたが、7月3日生まれの特徴は、独創的な発想力、そして実行する行動力である。また、自分の能力を発揮できる場では人生に生き甲斐を覚え情熱を注ぎ、創造性を発揮する。しかし、飽きっぽいのだ。

「偽りの作」でも、主人公は雪像造りに情熱を傾け、カンフルさえ打つ危険まで冒して作業をやり遂げるが、雪像が完成した段階ではすでに飽きがきているのだ。

一方、カフカの長編は、ほとんど未完に終わるが、これも7月3日の性格だろうか。加清純子の男性遍歴にも、この性格があるように思われる。